

「中大とEU」語ろう

5月6日から18日まで、「日・EUフレンドシップウィーク」と題し、パネル展示や映画上映などの催しが行われた。そのメインとなる催し「パネルディスカッションプログラム」が15日、学内で行われ、その会場をのぞいてみた。

ジェンダーをテーマに



女性問題についてのEUの活動状況を語る駐日代表部大使

「日欧とジェンダー・社会を支える女性達」というテーマのもと、前半は中大教授、駐日欧州委員会代表部大使のお話、後半は中大大学生代表と、欧州の留学生代表による各自の発表があった。客席はほぼ満席となり、日欧関係、女性問題に対する学生の関心の高さがうかがわれた。

このイベントは、駐日欧州委員会代表部から、EU資料センターを持つ中央大学の図書館長あてに依頼がきたもので、同委員会ではEUの代表として日本政府との交渉を行ない、駐日代表としてEUの本部に報告することを主たる業務としている。その一方で、日本社会のあらゆる層との接触を通じて日本・EUの関係の促進を図ることも大きな仕事のひとつだとしている。

今回の「日・EUフレンドシップウィーク」もそういった事業のひとつ

つで、中央大学、東京大学、慶応大学など都内大学でのパネル展示やイベントの他に、言語の多様性について考える国際会議、スポーツ用品メーカーによるサッカー教室など、その活動は多岐にわたっている。

開演10分前には、すでに予想を上回る多くの学生でほぼ満席となった。総合司会の法学部、中島康予教授と星野智教授は、それぞれのイベントの経緯、意義について話された。

駐日欧州委員会代表部大使のオプ・ユールヨルゲンセン氏は、現在の女性問題に関するEUの活動状況と今後の見通しについて「EUの法の下では男女平等が唱えられているが、特に女性の声が社会に反映されていない。これは構造的差別を表している。これまでは女性にのみ焦点をあててきたが、すべての生活場面の構造的改革が必要である。日・EUは多くの共通の課題を持っているので、いろいろな経験を交換することが有効である」と熱く語った。

さらに、理工学部の植野妙実子教授憲法は「女性の政界進出状況」についての講演を行い、仏で導入された政界における男女共同参画を目

的とした法律、「パリテ法」についての調査報告をした。

外国人留学生と日本人学生と見解の相違

後半、仏留学生のリュットさんは夫婦間の不払い労働について、日仏での価値、評価の相違を指摘した。英留学生のボニーさんは、家事、育児などの女性としての役割が英国でも今なお存在している事実を述べ、産業革命がその「役割分担」を加速させてしまったのではないかと指摘した。独留学生ビヨンさんは「女性と軍隊の関わり」を取り上げ、軍の技術職における不平等採用問題の経過を報告した。

続いて、総合政策学部の浅里さんは英・ヨーク大学での留学体験をもとに、同学部の小路さんは日本の職場環境について発表した。日本における不払い労働の現状について、「日本社会がその価値を認めている」とポジティブにとらえていたリュットさんに対して、家事労働人の偏った認識が女性の社会進出を妨げているとした日本人2人との間に、見解の相違が見られた。このことは「どの

主張を選ぶかは受け手にかかっている」というジェンダー論の実際を端的に表している興味深かった。

イベント終了後、学生に感想を聞いてみた。文学部3年の角田有紀さんは、「男と女は違うので差別がすべてなくなるとは思わない。しかし、それぞれが関心を持つことが結果的によい社会をつくると思うので、このような機会を増やしてゆくことが大切」と。法学部4年の八田部秀樹さんは「学生がこのような機会を利用して発表することはとてもいい。

関係各氏のコメント

互いに発信し合う関係を

中央大学 鈴木康司学長

昨今、中央大学生各々の語学力の上達ぶりには目を見張るものがあると思います。ですが、もし真の「国際人」を目指そうとするのであれば、単に語学ができるというだけでは、まだまだ不十分ですね。ええ。考え方も国際化しなければならぬでしょう。「思考の壁」を取り除くことは語学の向上と同じくらい大切なことなんじゃないかな。

二十一世紀はまさにインターネット時代なわけですから、学生交流も互いに発信し受信し合う関係を築いてゆくということが大切なんじゃないかと思えますね。

会場につめかけた学生



レポートの質が一段上がるよ！

中央大学国際機関資料室

荒木康裕氏

EU資料センターは中央大学図書館の国際機関資料室内に設けられている。政治、経済といった分野の資料もさることながら、離婚率などといった社会学のデータまで幅広く取り揃えている。学生にはほとんど利用してもらって知識の幅を広げてほしい。国際機関資料室ではEUのほかにも国連の資料なども閲覧できるようにしている。生の資料にあたることで世界、さらには日本という国を一步離れて客観的に見ることができると思う。レポートの質が一段上がるよ！。

学生同士ではなかなか機会がもてないので。商学部3年の石畑涼馬さんは、「日本人はEUと聞くと『経済・政治統合』ばかり思い浮かべがち。人種に対する共通認識の統合」に焦点をあて、ジェンダーをテーマにしたことはとても意義のあることだと思ふ」と話していた。

今回は学生の発表にとどまってしまうが、また機会があったら、学生同士の「ディスカッション」を取り入れることを提案したいと思う。

(学生記者・中西 奈緒)

中央大学とEUはつながっている！

駐日欧州委員会代表部大使

オプ・ユールゲンセン氏

中央大学としてEUとはどのような関わっていくことができるかという、まず中央大学にあるEU資料センターの存在を知ってほしい。駐日欧州委員会と中央大学はこの資料センターという太いパイプによってつながっている。こうしたつながりをどんどん利用してほしい。そしてできれば実際にヨーロッパを訪れてみて、自分の目でEUの国々を見てまわっていただきたい。

(この項、学生記者・山口 丈晴)